

令和4年度

大阪府障がい児等療育支援事業

専門研修会

家庭と教育と福祉の連携

2022年9月29日

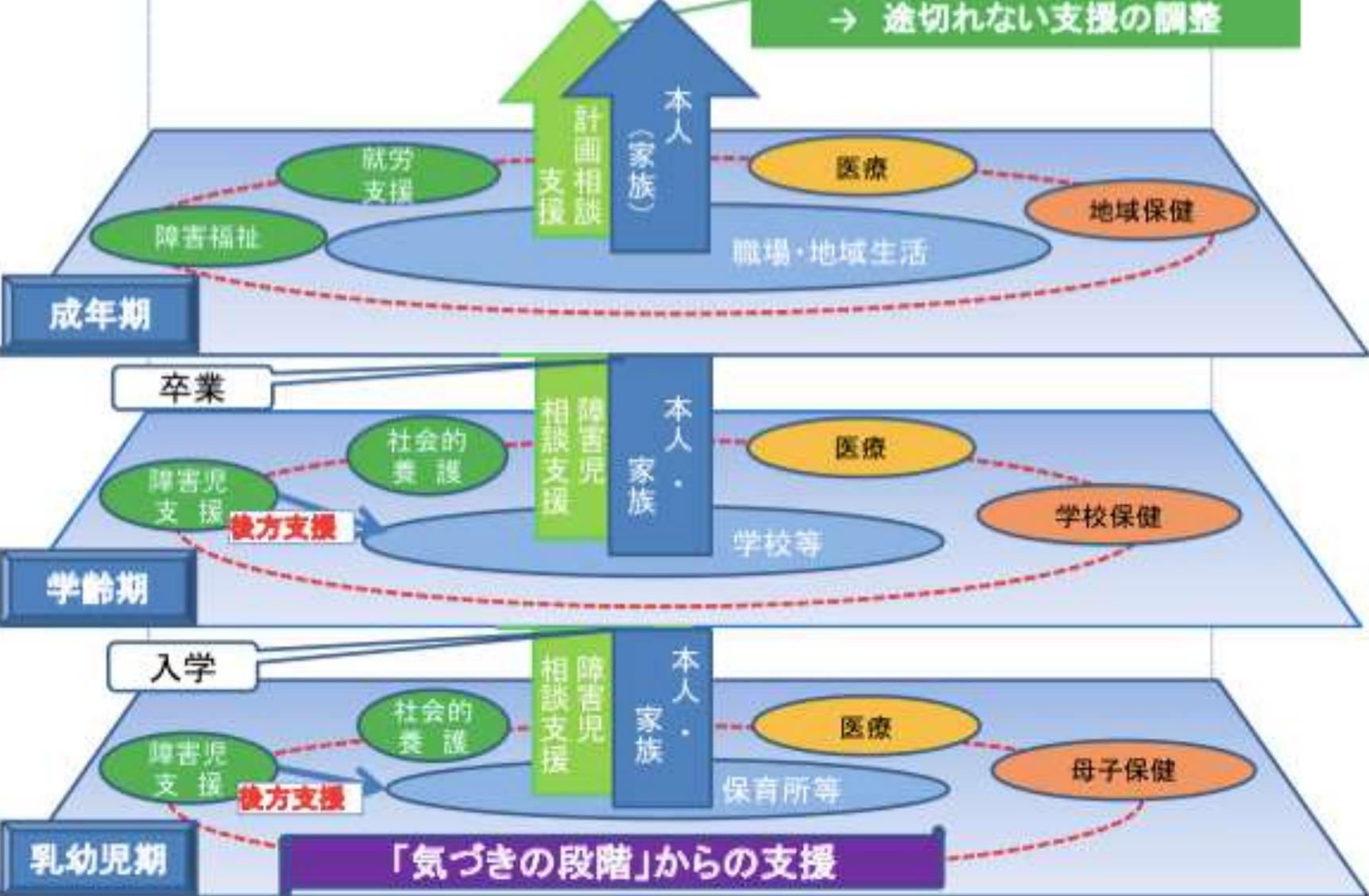
児童発達支援センター うめだ・あけぼの学園 副園長

作業療法士 酒井康年

地域における縦横連携の推進

地域における「縦横連携」のイメージ

関係者間の共通理解・情報共有
→ 途切れない支援の調整



縦横連携のうち 横の連携 = 水平連携

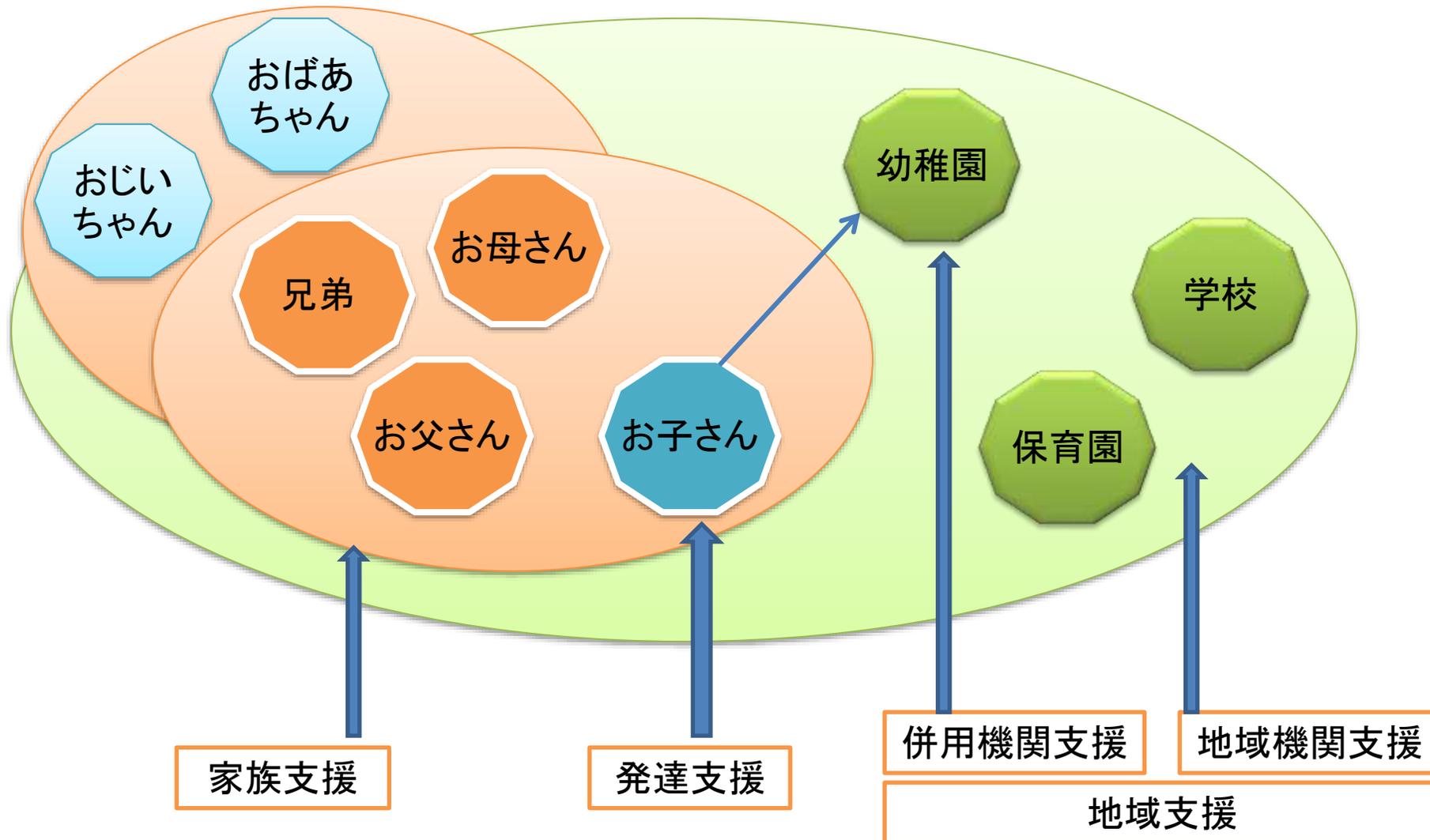
- 同じライフステージにある機関同士の連携
- 情報交換と情報共有と役割分担を
- インクルーシブな社会の実現のために、積極的な水平移行支援と、それを支えるための後方支援
- 一方で、必要な発達支援の機会と場の保障も重要

縦横連携のうち 縦の連携 = 垂直連携

- 異なるライフステージにある機関同士の連携
- 有益な引き継ぎによる情報交換と情報共有
- 「今」困っていることは、「過去」困っていた可能性。
「過去」なかったとしたら、それも重要な情報。
- 「今」の育ちと成果を、いかに「未来」に手渡していくか。
- 「自分たちだけ」は単なる自己満足に過ぎない。
主人公は「子ども」

2つの種類の 地域連携・地域支援

支援の三層構造



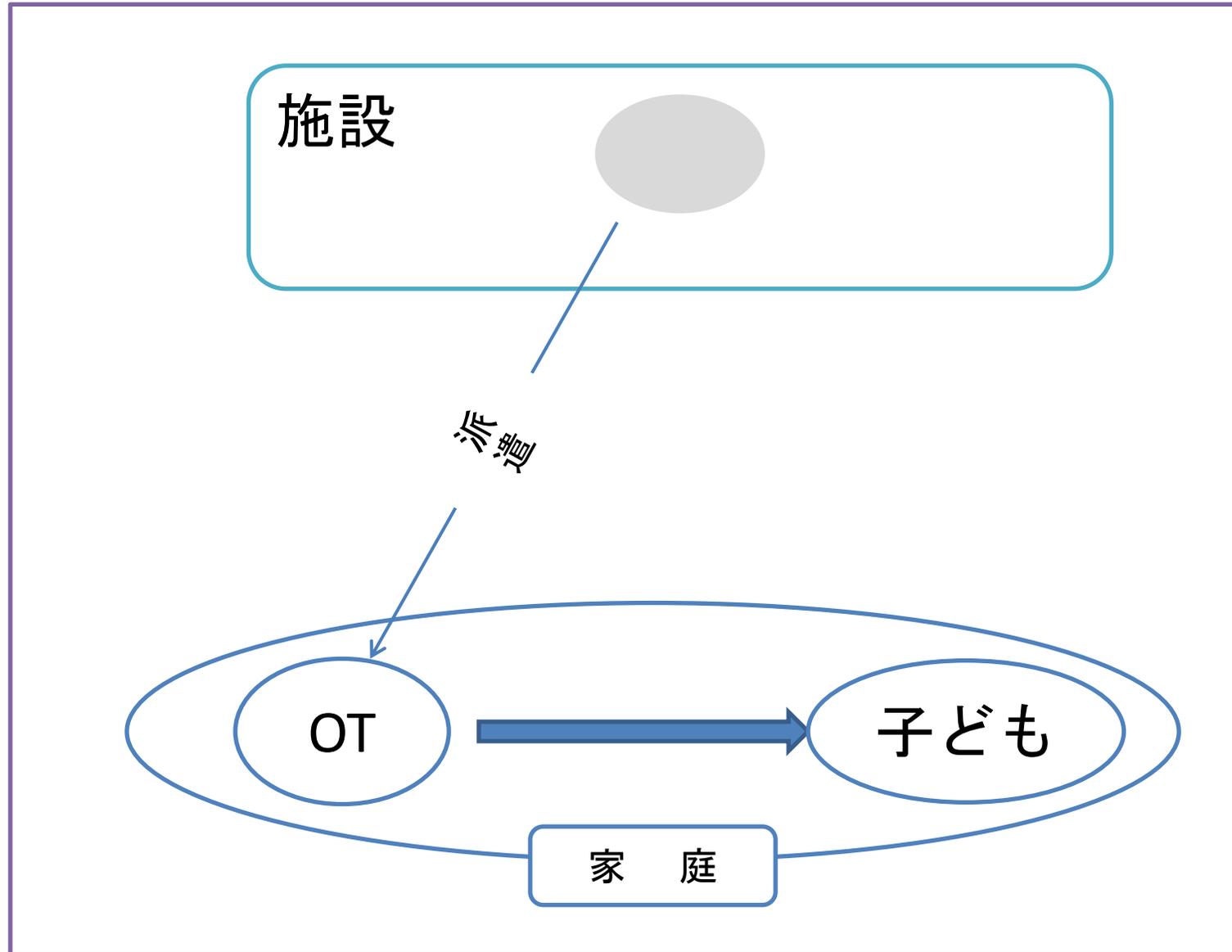
地域への関わり方について
機能としての分類

地域に関わる関わり方

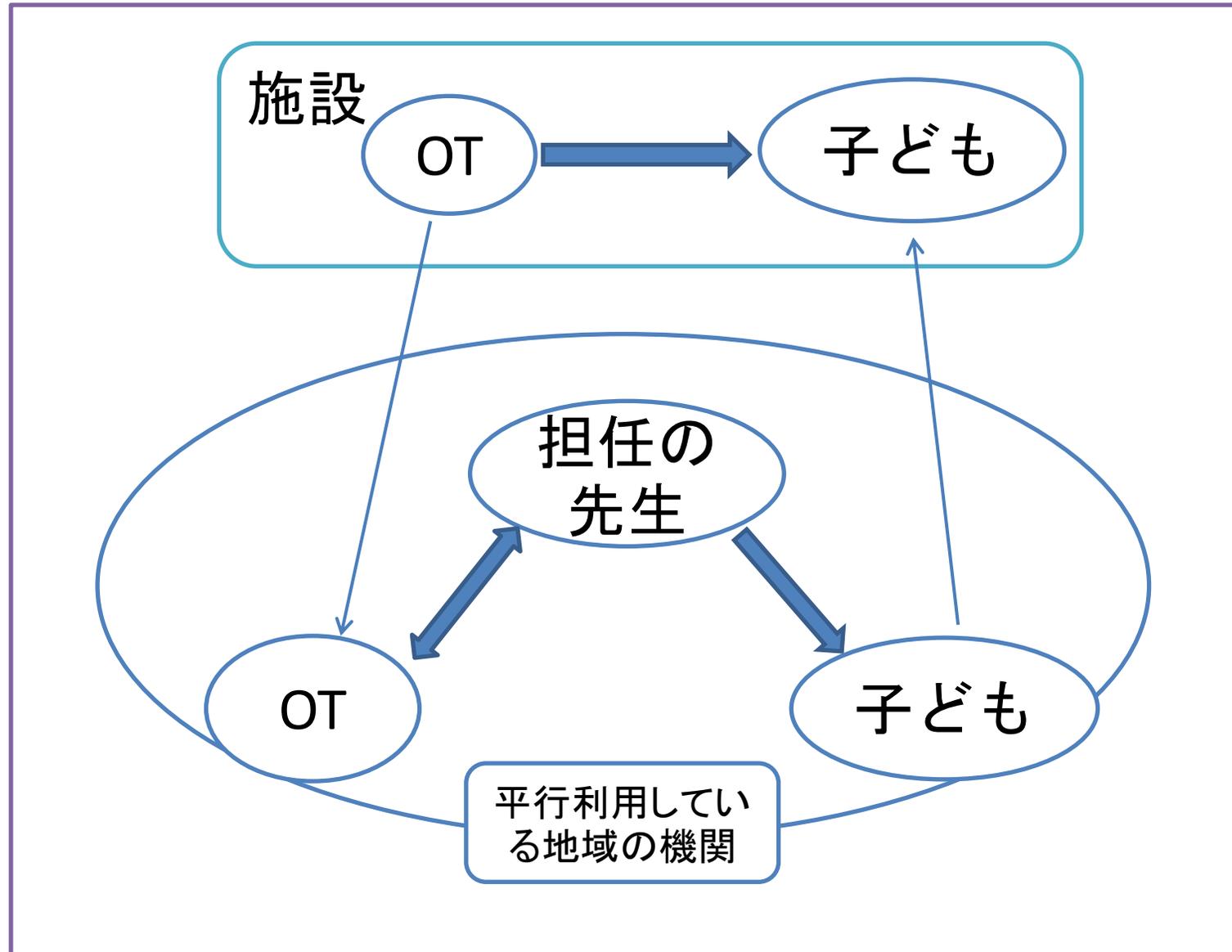
- セラピストモデル
- 機関同士の連携・協働モデル
- コンサルテーションモデル
- メッセンジャーモデル
- 健診参加モデル

小川恵子編：標準作業療法学 地域作業
療法学 第2版. 2012. 医学書院

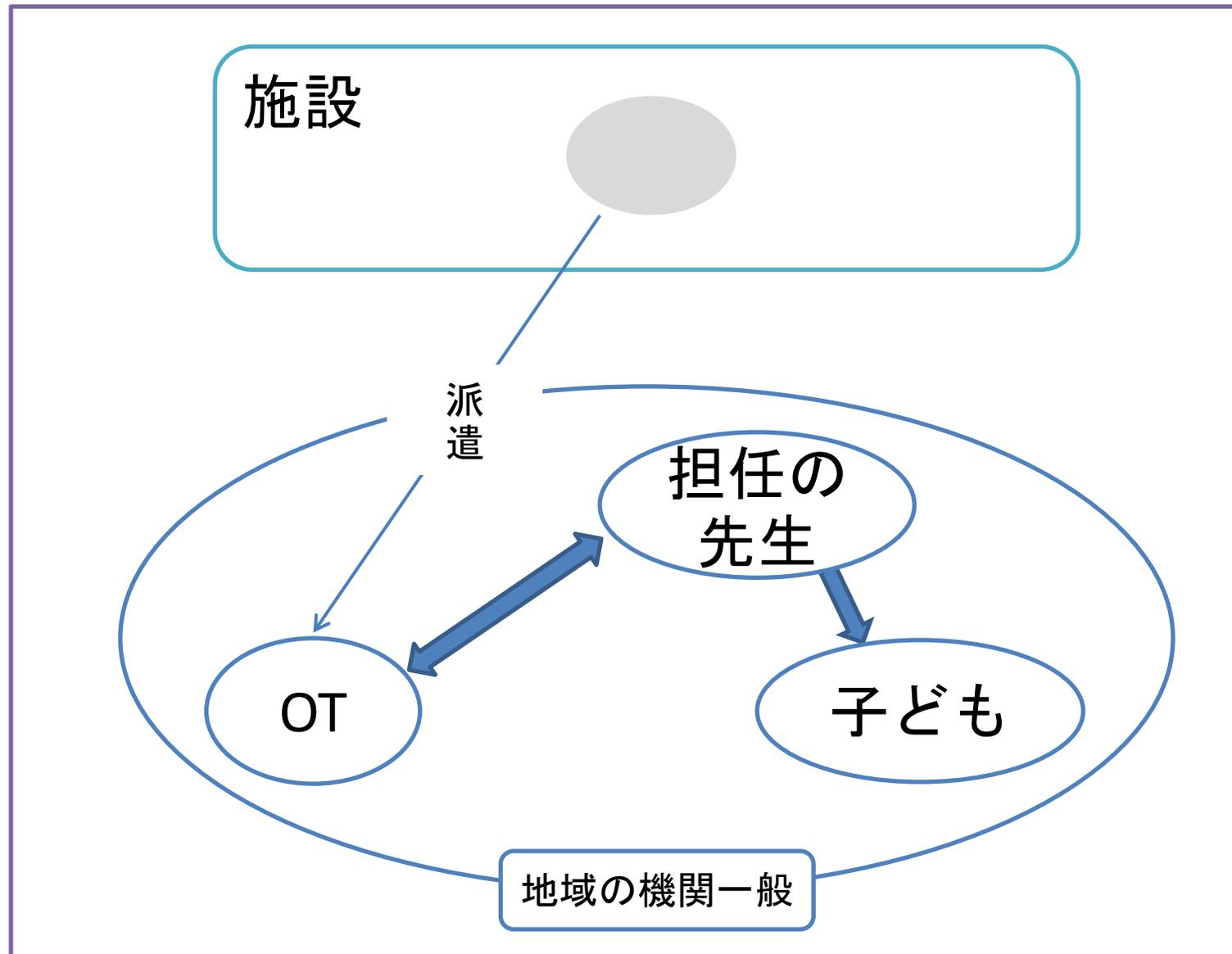
セラピストモデル



機関同士の連携・協働モデル



コンサルテーションモデル



他機関との連携をする上での 心構え

特に【機関同士の連携・協働モデル】に焦点化して
特に【水平連携】に焦点化して

あなたは何者ですか？

立場・分類

役割

- 求められる役割を超えて、役割遂行をしようとする
- 【善意のかたまりのおせっかい】
- やっかいな状況
- 期待されている役割
- 果たすべ役割

他の人のお家に、土足で踏み込まない

- そのお家の礼節・ルールを守る
- そのお家の大事にしているコト、モノは尊重される
- 「連携」とは、他の施設に、自分達の価値観を押し付けることではない
- 「連携」の成功イメージを、どのように持つか

連携とは

- 
- 顔が見えること
 - 話ができること
 - 相談ができること
 - 相手がやっていることを知っていること
 - 相手がやっていることを理解していること
 - 相手がやっていることと役割分担をしていること
 - 補い合いができる
 - 建設的な批判をしあえる

学校との連携

基本コンセプト

特別支援教育 と
障害福祉領域とは

異文化交流である

異文化交流において重要なことは
異文化に対するリスペクト
異文化を知ろうとする姿勢

学校の文化を知る

- 学校には独特の文化がある
- しかし、独特の文化があるのは、学校独特のことではない。
医療には医療の独特の文化があり、福祉には福祉の独特の文化がある
- それぞれに「**独特**」「**独自**」の文化がある
- 相手の文化を知ること
- 『学校教育行為』 として理解 (cf.医療行為)

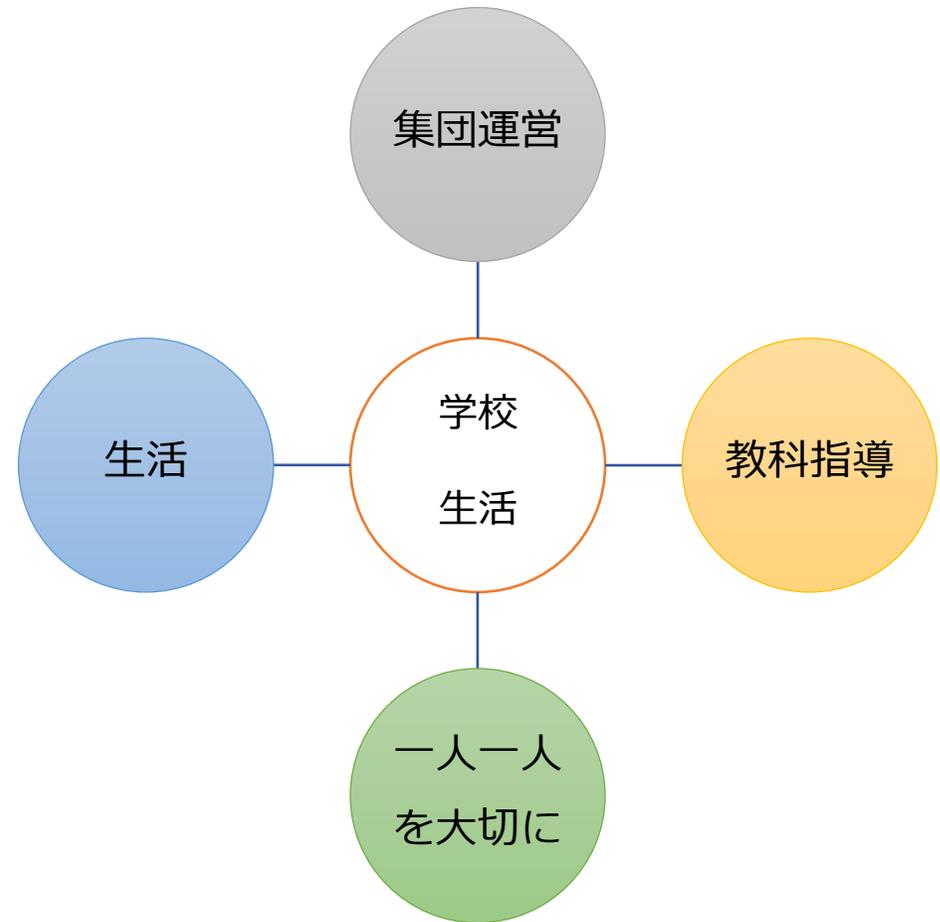
学校を知る

- 先生たちの興味と関心
- 学校教育活動を縛っているもの
- 公務員であること
- 学校教育活動において、できることとできないこと
- そういった制度や仕組みやならわしを、軽やかに飛び越えることができる人とできない人

価値観、優先順位を考える

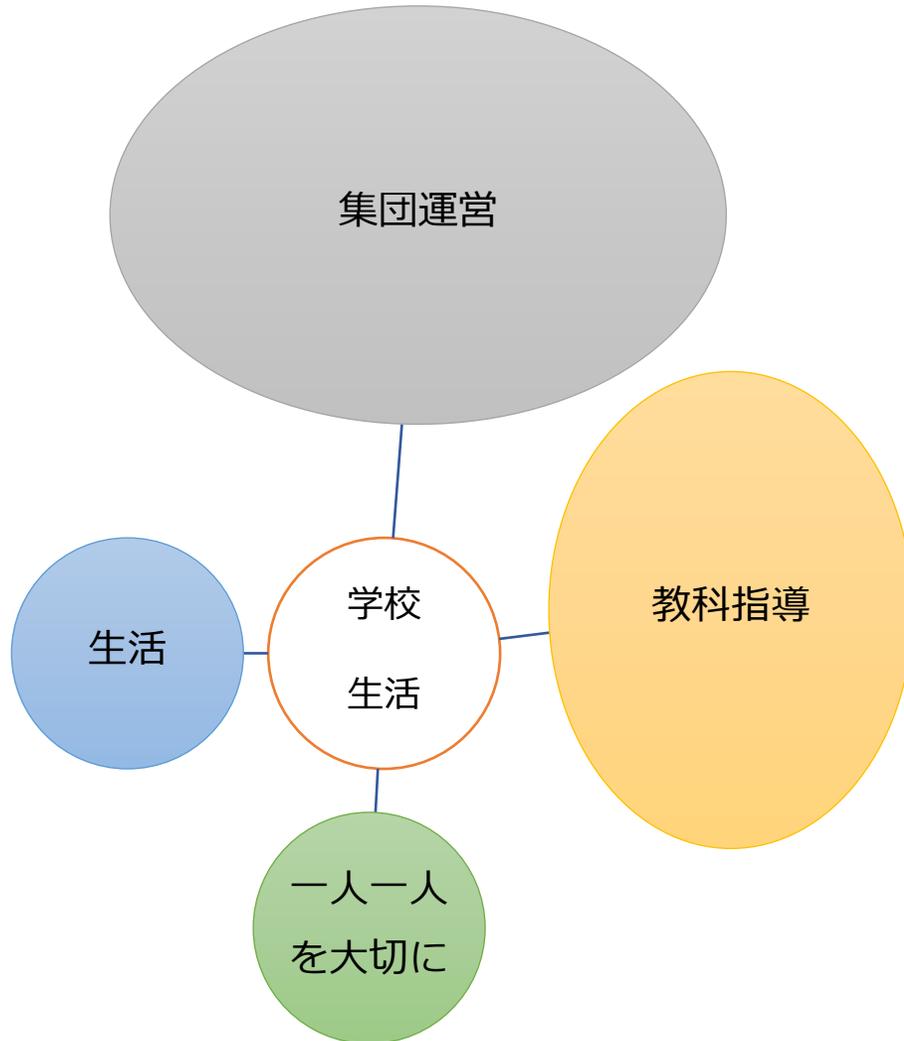
- 先生たちはどんなバランスか
- 保護者の方はどんなバランスを持っているか
- 教科学習の場面では
- 友だちと遊ぶ場面では

- 自分たちのバランスは??

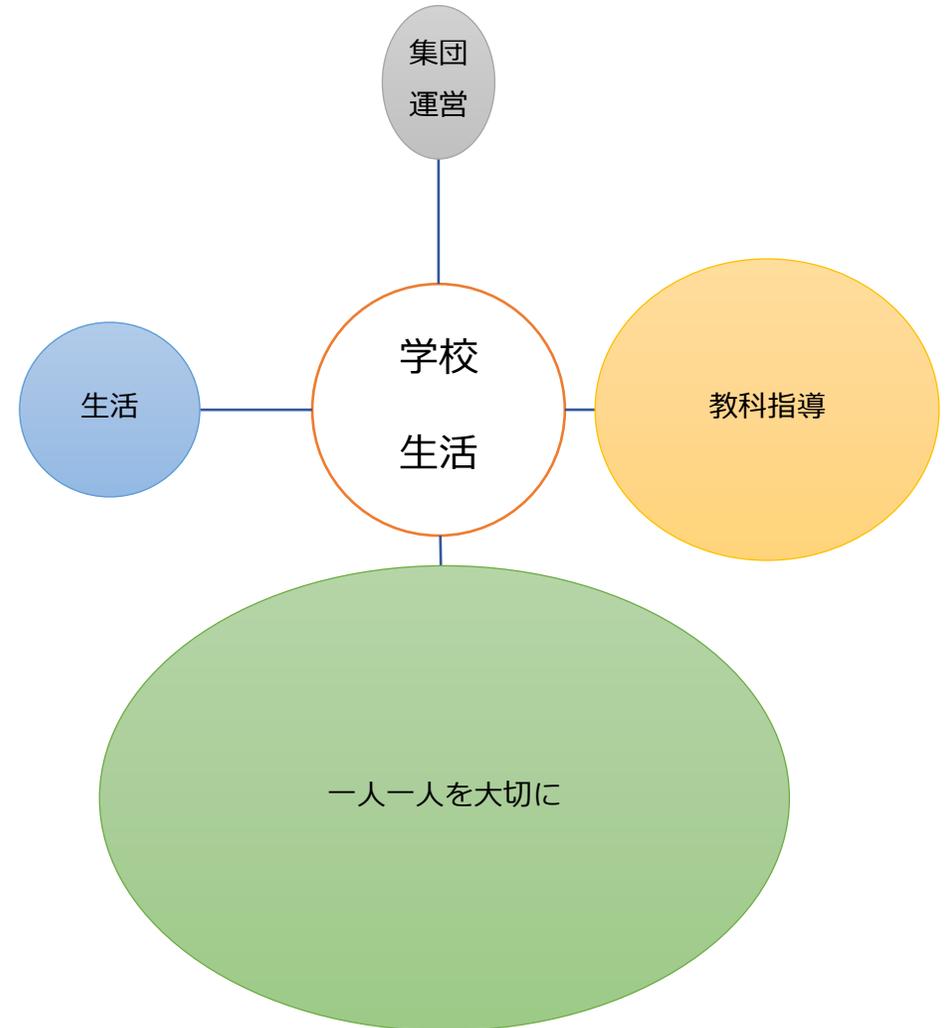


学校の先生たちの価値観

学校の先生のイメージ



我々のイメージ



情報交換 情報共有 が重要

- まずは、情報交換を行い、情報共有すること
- 価値判断はあとで
- 意見の統一、すり合わせもあとで
- 連携をする時の、**目的が重要**。明確に！！

学校教育活動を縛っているもの

- 学校教育法
- 学習指導要領
- 学校ごとに作成する教育課程

- 学校経営計画
- 年間指導計画
- 学級経営計画

- 公務員であること

生活リズムを知る 生活時間を推測する、想像する

- 学校の特徴
- 保育園の特徴
- 幼稚園の特徴
- 病院の特徴
- 児童発達支援事業所の特徴
- 放課後等デイサービスの特徴
- の特徴
- 1日の中での
- 月の中での
- 年間の中での
- 繁忙期
- 閑散期 . . . はないでしょうか

学校で作成される計画

個別の指導計画

- 幼児児童生徒一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導が行えるよう、学校における教育課程や指導計画、当該幼児児童生徒の個別の教育支援計画等を踏まえて、より具体的に幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法等を盛り込んだ指導計画※

2004：教育支援体制の整備のためのガイドライン

個別の教育支援計画

- 障害のある幼児児童生徒一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考え方の下に、福祉、医療、労働等の関係機関との連携を図りつつ、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、一貫して的確な教育的支援を行うために、障害のある幼児児童生徒一人一人について作成した支援計画※

2003：今後の特別支援教育の在り方（最終報告）

学校との連携

- 時間割の把握
- その日の活動の把握
- 学校での生活の様子の把握
- 学校での課題の把握
- 学校での指導方針の把握
- 連携方法の確認
- 今後連携をするときのタイミング
- 何がなされているかを知る
- その日の心身の状態に影響があるかないか
- 学校と同じ生活をしているとは限らない
- 何を課題として焦点化しているか。教育と発達支援では異なる。
- どんな方針で何をしようとしているか。すべて同一にする必要はない。共有はすべき

誰に連絡をすればよいか？

幼稚園

- 園長先生
- 副園長先生
- 特別支援教育コーディネーター

保育園

- 園長先生

学校

- 副校長
- 特別支援学校では特別支援教育コーディネーターが窓口になっていることも

特別支援教育コーディネーター

：校内で指名される。養護教諭が担っていることも。

何をする

- 学校見学をする
- 学校公開
- 行事の見学
- 事業所向け説明会
- 放課後等デイサービスで作成した個別支援計画を届ける
（保護者の許可をもらって）
- 学校で作成した個別支援計画や教育支援計画を受け取る

子どもへの支援状況に対して
疑問を感じた時には

さまざまな状況における 子どもの姿の把握をしましょう

- その子は、学校でどのように過ごしているか
- 学校での友達関係はどのようになっているか
- 学校での支援状況はどうなっているか
- 地域で友達と遊んでいる時の状況はどうか
- その他の施設を利用している時の状況はどうか

支援状況について 保護者から話を聞く

- どんな支援を
- どれだけ受けているのか
- 支援先からは、対応の工夫や、気を付けることなど教えてもらっていることはないか
- 支援先と情報共有をしたい！と許可をもらう

放課後等デイサービスなどを 利用している場合

制度上

- **相談支援専門員** が担当し
- **サービス等利用計画** を作成し
- 行政が支給決定をし
- **通所受給者証** が交付される

障害者手帳（愛の手帳、身体障害者手帳、精神障害者手帳）とは異なる通所受給を受けるための証明書

放デイだけでなく、対象となる子どもの生活全般を見渡して、保護者と一緒に、生活の組み立てをおこなってくれる役割

高齢者の【ケアマネージャー】に相当

子どもを専門にしている事業所が少なく、担当していない場合もままある

対象となる子が、どんな生活を目指して、1週間どんな生活をしているか、計画が記載されている。
どんな支援をどれだけ受けているか記載されている。

保護者が持っている利用計画を見せてもらい、**計画全体を把握し、学童保育の役割を確認する**。可能な時には相談支援専門員から直接話を聞くことも可能

地域連携と家族支援で注意すること

- 我々、連携先、家族という利害関係が入り乱れた三者が関係し合う状況にある
- 一方的な情報で判断すると、解釈や、事実そのものが異なっていることが、よくある
- 「また聞き」で判断しない、動かない。必ず確認をする
- 自身の立ち位置を意識する。戦略的に使う
- 連携とは情報交換であり、情報共有であり、役割分担である

連携することによって
課題解決を図る場合

課題を見立てる、焦点化する、 優先順位をたてる

行動を把握し、その要因がわかり、仮説がたったら、次は

優先順位をたてる

- できないことが、すべて目標になるわけではない
- 気になることが、すべて目標になるわけでもない
- すべてを本人の努力だけで解消することがベストとは言えない
- 時間をかけることのメリットとデメリットを整理して、把握すること
- 全ての情報の中から、優先順位をたてる

対応策の選択肢

- 本人の力が向上することを期待する
- 環境調整によって、持っている力を引き出す
- そのまま、放っておく（見通しとリスク管理をもった見守り）

課題を見極める

- 「気になる」 → 主語は誰か？
- 障害がある → 何が障害されている？
- 支援が必要である → いけないこと？
- 「課題がある」 → 課題がない子はいない



課題を見立てる

取り組みのアイデアを提供する

今後のプログラムの立案や、方向性の確認、方針の確認

先生たちが知りたいこと

- 先生たちは、どうすれば良いかを知りたがっていることが多い。
- 今日の、情報交換のその後からできること。
- 発達するのかどうか。
- 今のやり方で良いかどうか。

時に

- この場で良いのか、この子は障害児なのかの判断、診断名

方針立てをしていくときの配慮点

- 正しいことを言うことが正解とは限らない。正論だけでは、連携は難しい。あえて正論をぶつけることもあるけれども。
- 対象となる本人の問題だけでなく、先生やクラスなど周囲の環境の問題も含めた問題状況の全体の中から、優先順位をつける。
- ICF関連図や価値バランスなどを参考に。
- 優先順位の高いものに対応していく。

先生たちに伝えること

- その行動が起こってくる理由・背景の考察
- 今すぐできる対応
- 中期的に見て、発達を促進できるような対応

具体的な方法を具体的に伝える

- When : 時間帯やある活動に従事しているとき。毎日なのか、特定の日なのか。活動場面（授業、給食、自由遊び、トイレなど）での選択になるかもしれない。
- Where : 場所として、教室、廊下、園庭、事務室、玄関など特定のどこかを選択するのか、しないのか。友達の前や保護者の前、特定の先生の前など状況を選択することもある。
- Who : その対応をする人は、特定に大人なのか、全員なのか。友達も含めるのか。保護者も含めるのか。本人との関係性なども、もちろん考慮する。一緒に給食を食べている仲間、とか、一緒に帰る友達、とかである。
- What : どの行動を対象とするのか。Whenと関連するが、こういった状況の時のどの行動かという組み合わせで考える必要があるかもしれない。
- Why : 理由は様々なものが挙げられる。発達的に意味がある、発達特性や行動特性による、集団にとって意味がある、本人の性格による、本人の好みによる、周囲の特徴による、周囲の好みによる・・・などである。
- How : そして、それらの状況の中で、「どのように」である。例えば、声をかけるというのは、正面からなのか、後ろからなのか。名前を呼ぶのか、呼ばないのか。肩に手をかけるのは、声をかける前なのか、後なのか。などなど、挙げればキリがないが、ここをより具体的に紹介できるかどうかは、実際に行う先生方が具体的なイメージを思いうかべられるかどうかによるので、丁寧に考えたい。

家族との連携

家族支援とはなんですか？

家族を【支援する】ってどういうこと？

家族と【連携する】ことの成功イメージは？

- 家族指導 とはどう違いますか？
- 家族教育 とはどう違いますか？
- 家族を説得する、納得させること、ですか？

- 家族に対する金銭的支援・ヘルパー支援・家事支援ではありません
- **家族の【何を】【支援する】のか？**

- 支援者が考えていることを、理解し、納得し、実践することが、
【連携】ですか？
- **【連携】の成果は？**

私が考える作業療法における家族支援

保育においては？
保育所保育指針には
「子育て支援」
として記載がある

- **家族の作業遂行を支援**する
- 特に**子育てという作業遂行の支援**が中心的なテーマになる
- 私が「このように生活したい」「私の家族はこうありたい」ということはありますが
- 障害のある子の家族に対する理想的なイメージは、ありません
- 障害のない子の家族に対する理想的なイメージも、ありません
- 私が家族に対して持っている価値観とは関係していると思います。家族はその家族の価値観にたって家族が成立すれば良いと思っています部分

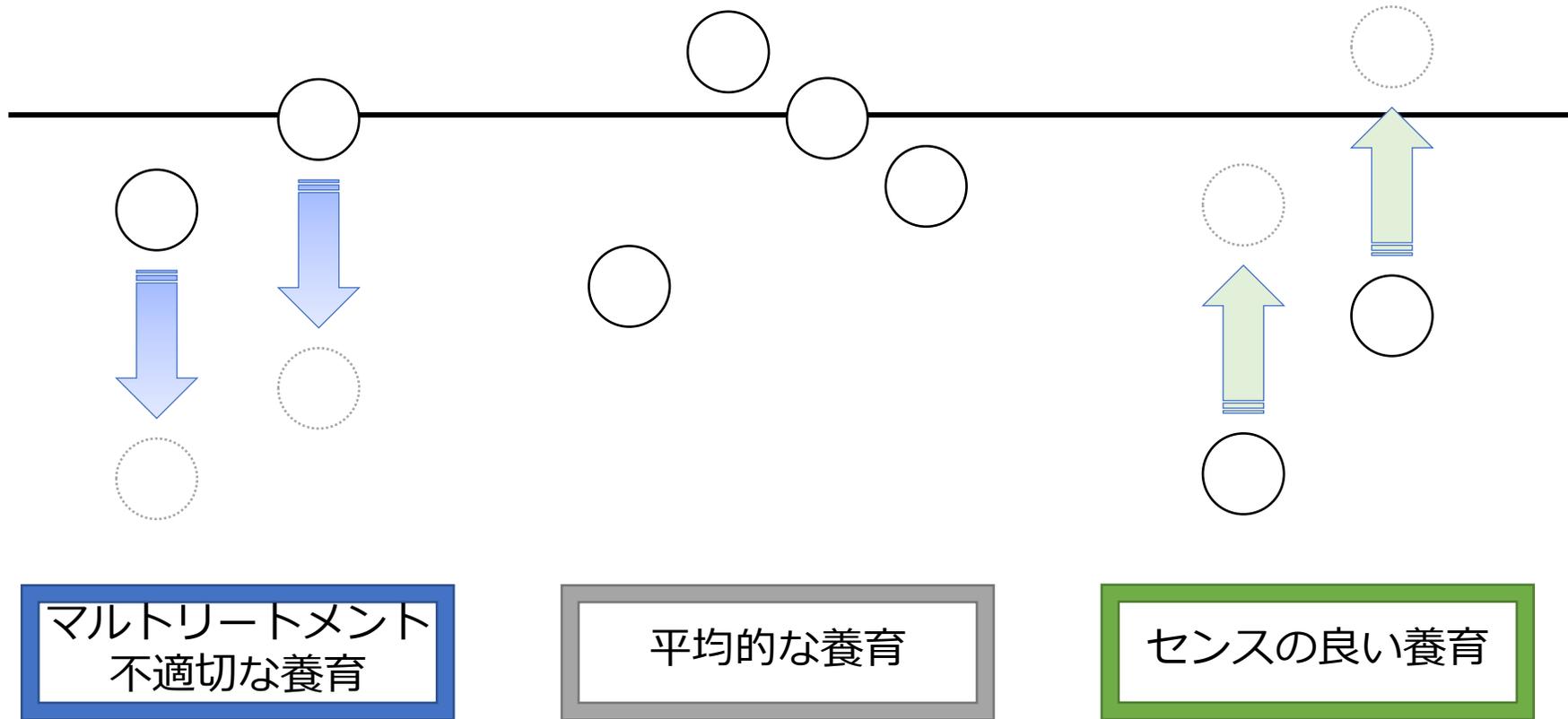
このようなことは知っています

- 子どもと子どもの育ちにとって、ポジティブな養育態度のとれる、安定した養育者の存在の重要性
- 子どもの育ちにとっての生活リズムの重要性
- 子どもの育ちにとっての文化的生活を、年少のころから提供し、経験することの重要性
- 親と家族にとって、安定的な経済状況が与える心理的影響
- 家族の在り様に関する多様な価値観
- 児童虐待の防止、障害者虐待の防止のための取り組み

保護者を支援する時に考えること

- ポジティブな意味で、素人であること
- 子どもの成長を願わない親はいない
- 心配していることと、その上でとる行動とは、個人差があること
 - 心配の仕方は人それぞれ
 - とる行動も人それぞれ
 - その先の心配の仕方も人それぞれ
 - 追い出されることへの不安
- 支援につながることがゴールではない
- 子どもの成長・特長・得意なこと・かわいいポイントを、共有できているか

親を見るときに



親になること

子どもが生まれたら、即親になれるのか？

- 社会的な意味合いと、心情的な意味合いと
- 親としての役割遂行
- 子どもに対する愛情は？
- 子どもが可愛くない、ってヘン？

障害を望んで生む親はいない

- 多くの親御さんは、みんなと同じように、輝かしい未来に対する夢と希望を持っていた
- 障害のある子どもの親に立候補したわけではない
- 障害のある子どもが生まれるというイメージは誰も持っていない
- 自分の人生観の喪失。人生プランの喪失

障害がある／発達が気になる子ども

に出会う

心の準備

も

知識の準備

もない

保護者に話すときに 気をつけていること

- 子どもを見る
- 性格を見る
- キャラクターを見る
- 専門用語の使い方
- 保護者の不安・心配を理解する努力をする
- そのために、保護者のシチュエーションを想定して話を聞く
- 自分の感覚で話を聞かない

例えば、こんな保護者

- 小学生の登下校で、
 - 心配だけど、家から送り出すだけ
 - 心配だから、お友達と会うあの交差点まで、ついて行く
 - 心配だから、お友達と会っても、200m一緒に歩いていこう
 - 心配だから、校門まで一緒に歩いていこう
- 自分なら、どう選択しますか？
- 上のそれぞれの保護者をどう思いますか？

こんな状況が加わったら？

- ただし
 - 校門まで歩いて5分
 - 校門まで歩いて15分
- 小学生といっても
 - まだ1年生
 - そろそろ3年生
 - もう6年生
 - まだ6年生
- そうは言っても
 - 私にも仕事がある
 - 生まれて間もない下の子がいる
 - 夫が家事はすべてやってくれる
 - 私、熱を出しやすい
 - 一度に二つのことは手につかない

自分の感覚で話を聞かない

保護者から情報を聞き出す

- 場面を限定する
 - 具体的な場面で聞いていく
 - そんなときどうしている？
 - 伝える内容は、Negativeなものだけでなく
 - 困っている = 困っているとは園ではない = 追い出されない
-
- 以下は別のこと
 - 子どもの情報をどう伝えるか
 - 子どもの事を受け入れられるか
 - 親が専門機関につながるか

子どもとの相互作用により 醸成されるもの

- 子育てのエネルギー
- 子どもへの声かけ、あやし
- 子どもへの愛情
- 親としての自信、親としての自己有能感

そもそも見ていること・ものが異なる

- 見ているフレームが異なるから
 - 見えているものが異なる
 - 一人一人事実は異なる
-
- 現象を確認することの重要性と難しさ
 - 現象を共有することの重要性と難しさ

ブログ「そらいろいろのたねのいえ」

ある考察。～「母親を責める」ということについて～より

- 「あやしても笑ってくれない」「抱いても泣き止まない」「ミルクを上手に飲めず、そり返って泣いてしまう」「多動で親の制止が効かない、叱ると逆にパニックになる」などの失敗体験や裏切られ体験が積み重なり、親の育児に対する自信のなさを増強させてしまうのです…（「子育てを支える療育」宮田広善 ぶどう社） そういう子育てをしている親に対して、「なぜもっと愛情をそそげないのか」と言われても、「あなた、そりゃ無理もないでしょう」と言いたくなります。
- なにもかもうまくいかない。子どもは幼稚園でトラブルばかり起こして、先生からは始終その報告を受ける。他の親からは、迷惑な子あつかい。自分には自分の仕事もある。疲れて家に戻って、急いで夕食の支度をし、お風呂の支度をして、子どもを寝かせる。自分も疲れている。心身ともに。そんなとき、ゲームをしてたらおとなしくしてくれるなら、逆にゲームを取り上げたら激しく騒ぐようなら、思わず「見て見ぬ振り」をしてしまうのではないのでしょうか…???

家族と【連携】する

- それぞれの役割や意見を持ちながら、有機的な連携をする
 - そのためには、話し合いが重要
 - 情報の共有と、情報の交換が必要
 - 意見の違いがいけないわけではない。双方に「違う」ことを認識することが重要
-
- 協力をお願いをすること は必要
 - それは連携ではない。依頼である

参考文献

- 中田洋二郎：子どもの障害をどう受容するか，大月書店，2002
- 田島明子：障害受容再考，三輪書店，2009
- 三浦幸子：心の理解と家族支援，2020
- 藤野博：発達障害の子の立ち直り力「レジリエンス」を育てる本，2015

まとめ

ネットワーク作りは異文化交流で

- ネットワークは
- 役割が異なる機関と
- 守備範囲が異なる機関と
- 専門性が異なる機関と
- 専門性が異なる職種と
- つながることに
- 意味がある
- 役割、専門性が異なるということ
- 文化が異なる
- 意見が異なる
- **異なるからこそ、集まる意味と価値がある**
- **異なるからこそ、つながる意味と価値がある**
- **同じでよければ、こんなに面倒なことは必要ない**

発達が気になる子どもを地域で支援! 保育・学校生活の作業療法サポート ガイド

福祉領域での多職種コラボレーション

酒井康年
メジカルビュー社
2016年



酒井康年、松本政悦、本間嗣崇

地域で働く作業療法士に役立つ
発達分野のコンサルテーションスキル

2018年
三輪書店

